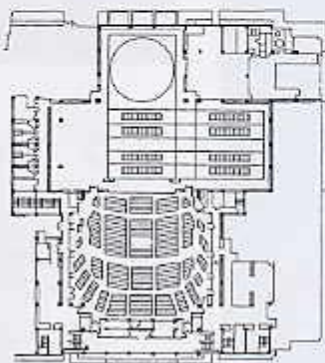




全景



大アトリウムはフォーラムとつながっている



大ホール階平面

日本のオペラハウスと オペラタウン

伊達 美徳

欧米なみに専断オペラ劇団を持っていて、劇場舞台を3面以上もつものオペラハウスとすれば、日本にはハウスはあるがオペラハウスはひとつも無いことになりました。まだそこまで日本のオペラは育っていないのでしょうか。でも、ここまでハードがくれば、ソフトももうすぐでしょう。

そこで、ここでとりあえず、舞台を3面以上備えている劇場を、本格的なオペラハウスの候補ということにしましょう。

これに該当する劇場は、名古屋、浜松、横浜、そして富山の各市にあり、いずれも公立です。今度の新国立劇場でも館目となります。5館もあるというが、5館しかないというが、このところあちこちの市町村で文化ホールづくりが流行っていて、大津と西宮にも多面舞台の劇場を計画中です。

そして競争があります。箱となる劇場が先か、中身となる劇団や楽団が先か。中身あっても活動の場がないと困る、いや中身がなくて箱を作るのは無駄、などなどです。

そこで、文化ホールの極致ともいえるオペラハウスが、どのようにして作られ、運営され、都市に位置づけられているか、内外のオペラハウスとオペラタウンを見ることにしましょう。

愛知県芸術劇場

芸術劇場は、3面半舞台を備える大ホールを持つ本格的なオペラハウスであり、他にコンサートホールと小ホールがある。

芸術劇場のある愛知芸術文化センターは、名古屋都市の利用しやすい位置にあって、美術館と文化情報センターの3つの県立の文化



田辺源四郎

施設が入っている巨大な文化複合施設だ。

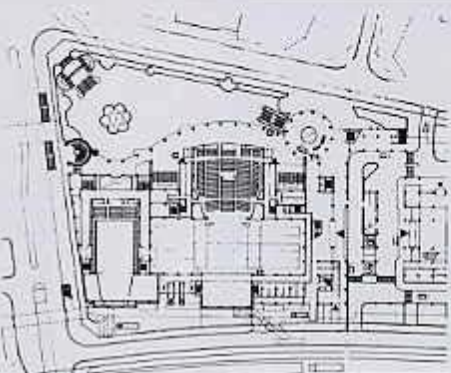
これだけの代表的な芸術文化活動の施設がオペラハウスを中心に一体の建築になっている。まさにオペラタウンを形成している。なかでも、文化情報センターには、全体コーディネート機能が期待されることだ。

開場してから5年、音楽と美術とは利用者が異なるし、当初の目指したように芸術文化センター全体が実態一体となって運営されるようになるには、まだ時間がかかるようだ。しかし、都心のこの場所にこれだけの文化施設の集積は、互いに文化的刺激をしながら、東海地域に新たな文化を生み出す力になっていることは確かだ。

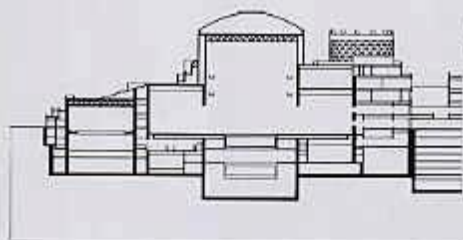
＊劇場データ
劇場運営事業：
愛知県文化振興事業団
開業 1992年
規模 大ホール：2500席、
舞台3面半。
コンサートホール：
1800席
小ホール：
設計監理：A&T建築研究所



浜松市のランドマークとなるタワーと統合している



大ホール配置図



断面



周辺地図

アクトシテイ浜松

ここは旧鉄時代の線路があったところだが、新幹線がらみの区画整理で生まれた駅前特等地である。

浜松市には国際コンベンションシテイ構想と音楽文化都市構想があり、工業都市から文化都市への転換を図ろうとしている。

大きくはそれらを拠点としてアクトシテイは位置づけられ、オペラハウスは音楽文化都市浜松の核となり、アクトシテイの文化核でもある。

このビル自体がまさに互いに刺激し合う多様な機能を含んでいるタウンである。駅前地区の計画的な再開発による街づくりの一環として見ると、ここもオペラタウンであるといつてよい。

***劇場データ**
劇場運営事業：
アクトシテイ浜松運営財団
開業 1994年
規模 大ホール：2236席、
舞台4面、
中ホール：1000席
計画・設計監理：日本設計

劇場の大ホールは4面舞台を備え、本格的なオペラハウスである。

JR浜松駅前に、ホテルやオフィスのはいった船色の超高層ビルが建って、新しいランドマークとなっている。その足元に線路に沿って劇場、会議場、展示場、博物館などが並び、これらを合わせてアクトシテイと呼ぶ市民の大複合施設である。



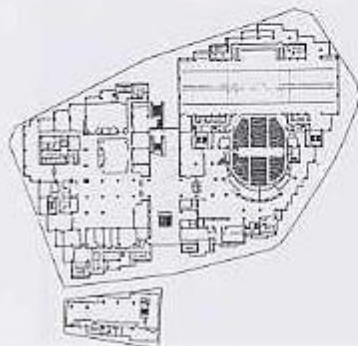
大ホールは華麗な装いでいい



海浜の街の中にある大演劇施設



周辺の地図



大ホール様式断面

横須賀芸術劇場 (横須賀市)

横須賀芸術劇場は、客席は馬蹄形、舞台は3面半で本格的なオペラハウスを目指している。日本のオペラの第一人者の関伊玲磨さんが、計画段階から運営まで指導にあたる。駅前繁華街の一角にあって、市立のこの劇場と商業交流プラザ、民間のプリンセスホテル・マンション・ショッピングなどが一体となり、建物が街のようにならわいだ。

すぐそばの横須賀湾に米軍基地の潜水艦や軍艦が見え、道むかいに大ショッピングセンター、左隣先は個性的な商店街のドライブ通りと、ここは繁華街の中心である。このあたりは戦前戦中は日本海軍基地、戦後は米海軍基地に寄生する繁華街だったが、円高で水兵たちのお小遣いが決くなり、街はさびれていった。

この劇場の土地には、かつては米海軍基地の倶楽部センターがあった。占領下で、ここから数多くの日本のジャズメンが育った戦後史がある。それが閉鎖され廃屋となり、街はますます打が消えたようになっていった。

その一方で、この駅前一帯地を横須賀市民に取り戻そうと粘り強い運動があり、その政

果がこの世演劇場を含む再開発となった。だからこの劇場はまちづくりそのものなのだ。開場から3年、街は文化の香りでよみがえってきた。街に華やかなオペラがやってきて、ここはオペラタウンになった。

この劇場の周りには官民の各種の開発が動いていて、都心人口の回復が期待されている。*黒字経営の公立劇場

この劇場は公立施設には珍しく、独立採算で経営している。全国この種の施設を取支状況は、収入に対して支度がほぼ倍の大赤字とされている。横須賀芸術劇場では、ほんのトントンで黒字が出ているそうだ。

たいいての公立文化施設の収入は、運営組織には入ってこないで一般会社にはいる仕組みだ。劇場職員が一両懸高稼いでも、劇場で使えないから経営感覚は生れにくい。

横須賀芸術劇場では、その運営組織である財団法人に収入はすべて入り、自主運営に使えるようにした。責任もあるがやりがいもある経営体制である。ところが、日本でこのように運営方式の文化ホールは、いまのところほとんどない。

もつとも、施設維持費は市からの管理委託費に頼るから、厳密には完全独立採算ではないが、そこに公立文化施設の意義もある。

ここでの自主事業の内容は、今年から始まった世界オペラコンクールのようなトップレベルのものが多い。それはかならずしも客の入りやすいものばかりではないが、経営努力が直接反映するので職員のセールスへの意気込みも高い。

*劇場データ

劇場運営事業
財団法人横須賀シアターセンター
開業 1995年
規模 大ホール：180席、
舞台3面半、
小ホール：60席、可変舞台
基本計画：アール・アイ・ユー
設計監理：丹下建三都市建築研究所



大ホールは「即ち利用のことも」



新北地区の核をなす



夜間が美しい

*劇場アーク
 劇場運営事実：
 富山市民文化事業団
 開業 1996年。
 規模 大ホール：
 1650~2200席、
 舞台3面半。
 実設計：
 入米設計、劇場工学研究所

1 京富山駅の北口を出ると、真ん前に富山市立「オーバードホール」はある。都市づくりのテーマ「劇場都市とやま」の拠点である。この劇場は、3面半の舞台を持つオペラハウスである。面白いことに地方都市らしく多目的な利用方法を考えて、客席の一部を開閉し

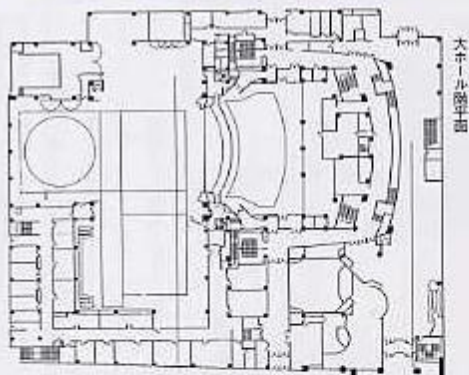
富山オーバードホール

て1650席から2200席に規模を変えられるようにしている。

このホールは駅前に単独にあるのではなく、「よま情報センター」や民間商業施設とも一体となっており、いろいろの人が出入りする複合施設のにきわいを持っている。

更に周辺には女性、福祉、スポーツ、交通などのセンター施設や親水文化穴場があり、富山の顔となる街になりつつある。

これらが運営でも連携するにはまた時間がかかるだろうが、こどもオペラハウスが核となるオペラタウンなのである。



大ホール階平面



周辺地図

1/25000